

## 「遠羅天釜序」の考察

常盤義伸

白隠慧鶴禪師『遠羅天釜』上・中・下三巻が寛延2(1749)年己巳、著者65歳のときに自筆刻本で出版された。最近、私は禪文化研究所の芳澤勝弘氏のご好意でそのときの版本(金閣寺所蔵本、ただし奥書の部分を欠く、のマイクロフィルムからの拡大コピー<sup>1</sup>)を見る機会に恵まれた。この版本には筆者の名を記さない「遠羅天釜序」と白隠の弟子、斯経慧梁による「跋」(後書き)が添えられている。これらは龍吟社、昭和9年発行の『白隠和尚全集』第五巻に文字を普通の形に直して収められているので、内容については大体のところが知られているが、署名のない「遠羅天釜序」については、その筆者が明らかにされておらず、それに伴って、白隠の思想を研究するものの間では「序」の内容理解も不十分なまま読み過ごされてきた感がある。今年度の禅学研究会で白隠自筆刻本の実物に迫る機会をコピー所有者芳澤氏から提供されたことを機に、「序」の内容を多少検討することができたので、その報告をした。当日(11月15日)、東京から参加された藤田吉秋氏(妙心寺派東北寺住職)から二三の貴重なご教示を得たので、それらを手がかりとして再考したことを含めて書き加えた拙稿を提示して、白隠慧鶴禪師の思想究明の一助となることを願うものである。

I まず「遠羅天釜序」の読み下し文を示す。送り仮名は、基本的には版本記入の片仮名を平仮名に直して用いた。句読点は原文にはない。

### 遠羅天釜序

鉢圓之<sup>2</sup>鏡、古を鑑て始め無し。高く性空に懸るときは則(ち)萬象是れ寶鏡なる哉<sup>3</sup>。三世を照すときは則(ち)三世是れ寶鏡、六塵を照すときは

則(ち)六塵是れ寶鏡。平等法界一面の寶鏡従り(○ヲラテカマ序 一)生佛の二影分る焉。二影も亦寶鏡也。我が師、善男信女をして鏡を磨せ使<sup>レ</sup>むる、旨有る哉。垢盡き明現ずるときは則(ち)衆生<sup>の</sup>之面て、佛面に非ず耶<sup>々</sup>。因と修與、躰一寶鏡、阿鼻無間日面鏡焉、月面鏡焉、明けし矣。背面無きこと也。鏡を磨せ令る所以有ること<sup>在</sup>り也。

肥之前州攝津君、師の籌室を扣て書問往復せり。參友不傳、角田氏<sup>つのだ</sup>與言思再歎して剗願氏に付す。其餘の随自意、随(○ヲラテカマ序 二)他意、集て以て梓に鏤め、人をして磨鏡の真修有ることを知ら使<sup>レ</sup>む。名て遠羅天釜と謂。分て三帙と為す。

遠羅天釜<sup>とは</sup>者、火爐頭之人<sup>と</sup>知る焉。必ず焦頭爛額に付す。其の祕妙、見易く知り難し也。茲に一語有り、其の半邊を擧す。曰く、妙に方於<sup>レ</sup>達すれば即ち是れ眞の秘なりと。此の語近し矣。此の書、以て盡すときは則(ち)大寶藏殿に登而<sup>レ</sup>一切衆生唯一眞如の寶鏡<sup>ならん</sup>也。不傳此の刻、此於<sup>レ</sup>出でず。以て序と為。(○ヲラテカマ序 三)

寛延己巳歲初春日

炷香拝書

(序の試訳) 円さをその本体とする鏡は、その歴史を調べて見ると始めがない。これが我々の本性空(くう)という空(そら)に高く懸かっているときは、なんと、一切の現象がほかならぬこの宝鏡そのものではないか。これが過去、現在、未来の三世を照らすときは、実に三世が宝鏡なのだ。これが見られ、聞かれ、嗅がれ、味わわれ、触れられ、思われる六つの対象を照らすときは、それらの六つの対象がそのまま宝鏡なのだ。その訳はこれが、一切のものの本来の在り方である、差別を離れた絶対平等の性質を表わす、一面のものであるからである。この一面の宝鏡から、我々の目覚めていない在り方である衆生と目覚めた在り方である仏との二つの姿が分かれてくるのだ。しかもこれらの二つの姿も、同じく宝鏡なのだ。私の師が善男信女に鏡を磨かされるのは、理由があるわけである。垢がすっ

かりなくなつて明るさが現われるときには、なんと、衆生の顔が仏の顔ではないか。ここでは、もとの在り方と修行した在り方が本来一つである。間断なく続く苦しみ在地獄と、それを映す昼の太陽と夜の月とも、この宝鏡であることはあきらかだ。なぜならこれには背面がないのだ。鏡を磨かせることには実に深い理由があるのである。

肥前の国の藩主、鍋島摂津守殿は、我が師の方丈を訪れられ、さらに書簡でもって問答を交してこられた。<sup>2</sup>共に参じた私、不伝は、[鍋島殿下近侍の]角田氏と話し合つて改めてお二人の問答の内容に感嘆し、[わが師の書簡を]版木屋に渡した。そのほかの、師が自発的に書かれた文と人のために書かれた文とをも一緒にして、版木に刻むことにした。人々に、鏡を磨くという本当の修行があることを知らせるためである。全体を『遠羅天釜』と名付け、上中下の三篇とした。

「遠羅天釜」が何かは、火爐（暖炉）当番の人ならよく知っている。これは熱く燃える火に頭や顔を焼け焦がした人に与えるものだ。その素晴らしい秘密は、見ることは易いが知ることは難しい。たまたま一つの言葉があつて、この「遠羅天釜」の優れた秘密をかなりよく言い当てているので、その半分を示す。

「方というものに優れて達すれば、それが本当の秘訣だ」と。

この書物『遠羅天釜』を究め尽くした人は、即座に大宝蔵の建物の上に据えられる、「一切の衆生の本来である唯一の真如」という宝鏡となろう。私不伝のこのたびの翻刻出版の意図は、このほかにはない。以上をもって序とする。

寛延二年正月

香を焚き謹んで記す

(1) この序分の筆者を私は、白隠自身と考える。序の文面では「わが師」に鍋島摂津守とともに参じた「参友不傳」が『遠羅天釜』翻刻出版の当事者であることを名乗っており、しかも序文のあとに「参友不傳」執筆のはずの

四文字「炷香拜書」が白隠の筆跡であり、それに跋の筆者、斯経慧梁が、自分はこの書物の出版を直接、師・白隠から依頼されていないことを述べているので、翻刻出版者「不傳」が斯経慧梁ではありえないことから、そのことは明らかである。白隠が自分の著書の自筆の序文に「わが師」と書き、妙な名前の弟子がこれを記したという書き方をするのは、彼の作品にままた見られることである。

すなわち、八年前、寛保元年(1741)秋の日付をもつ「寒山詩闡提記開序」は、執筆者として序文のあとの日付に続いて、「闡提窟中困学寒士飢凍布衲炷香稽首題」と記されている。その上巻終り近くに寒山詩の評のなかに記されている「夜船閑話」も、漢文で「師近頃初心辨道…の為に…繁文を顧みず此れを記す」として紹介されているのである。

斯経慧梁の記名入りの後書きを、読み下し文で示す。

先佛の遺言赫乎として三藏存し焉、乃祖の玄旨炳然として五燈傳ふ焉。蓋し自利利他、已むこと能は不る者のか乎。於戯<sup>あ</sup>此の書の如き者、明辨<sup>の</sup>觀縷、先規を墜<sup>す</sup>さ弗。謂つ可し、未聞<sup>の</sup>之聞也なりと。之を讚するときは則ち大虚、翳を生じ、之を謗するときは則ち巨海、泡を起す。第<sup>(てい)</sup>復た何をか言わん。其の或は諸を炬に附し、或は諸を紙に上す(○ヲラテカマ跋一)、其の跡、異なりと雖も、其の道、一也。何んとなれば則ち法門の威儀惟(だ)、是を以て之れ勤む。向きに近驛二三の白衣、予に語<sup>ら</sup>せて曰く、聞く、師、頃ころ徒に示す之長書有り。我が曹<sup>(ともが)</sup>ら觀覽(の)便り無して而も且つ謄寫乎嫌有り。請ふ、力を戮せて諸を梓に鏤め、以て冀くは、住庵精修<sup>の</sup>之諸子をして以て墨を允(ねぶ)る之<sup>の</sup>勞を免かれ令ん、と。予が曰く、善哉、如し政こと有らば、吾を用い不<sup>と</sup>雖(も)、吾、其れ之を與かり聞ん(と)。是に於(て)乎、其の業を卒ふ也矣。寛延第二龍舎己巳歲仲春日、參學小比丘慧梁、焚香九拜敬題。

遠羅天釜者、師平日用ゆる所<sup>の</sup>之茶鼎なる<sup>の</sup>耳。何為れの義といふこと知

ら不也。

(○ヲラテカマ跋 二)

(跋の試訳) 古の覚者、釈迦牟尼の残された言葉は大蔵経として現存し、祖師方の奥深い趣は五つの伝灯録に伝えられています。これは、思うに、自ら悟り同時に他をも悟らせたい、そうせずにはおれない、ということでありましょうか。この『遠羅天釜』のような書物は、理路整然としてこと細かく詳細に述べられ、しかも言葉に溺れないという古来の原則を失わず、その表現は始めて聞くことばかりの貴重なものであります。うかつにこれを賞賛すれば虚空に陰が生じ、これを排謗すれば大海に泡が起こるというたぐいのものですから、これ以上に弟子の私が言うべき言葉を知りません。祖師方のなかには、伝灯の言葉を記した記録を松明にくべる人もありました。また、しかし記録を後世に遺す人もありました。両者の歩む跡は違っても、筋道は一つです。すなわち両者共に、目的とするものは覚の働きを伝えることにあるからです。

暫く前に、原に近い宿驛に住む二三人の居士たちが私に告げて申しますのに、「聞くところでは禅師は最近門弟の方々に長文の書き物を読まされているとのこと。私どもはまだ一度も拝見したことがなく、またもし見せていただいても、書き写すことは苦手です。なにとぞ、私どもも協力しましてこれを版木に彫らせ、書物にさせていただきませんか。庵に住んで修行に精を出しておられる皆様にも、筆写の筆をねぶる手間が省けるようになってもらいたいものです」と。私は申しました、「それは善いことです。

[孔子が言っておられます、]もし政務に関することであれば、たとえ今自分は引退しているとしても、必ず私に相談があったはずだ、[あなたの受けた相談は政務には関わらぬ個人的なことだったのだ]と。そんなことで私は[事情を知らぬまま]出版の仕事を引き受け、こうして出版の日を迎えた次第です。

寛延二年、竜の宿る己巳の歳二月 参学小比丘慧梁、香を焚き九拝して謹

んで記す。遠羅天釜は、師が平生用いられる茶釜というだけのことで、それがどういう意味かは、まったく知りません。

ここでは跋文の筆跡は斯經慧梁のもの、そして「○ヲラテカマ跋 一(二)」は白隱の筆跡である。慧梁が引用するのは『論語』第十三、子路篇第十四で朝の会議から帰ってきた冉有にむかって言われた孔子の言葉であることを、藤田氏から教えていただいた。その上で改めてこれを『論語』の文脈から慧梁の状況に移し変えて考えると、慧梁は結局、『遠羅天釜』出版のことを、白隱道場の公的な計画としては何も聞いておらず、間接に近辺の居士たちを通して師・白隱の私的な希望として知らされ、協力を約束したことになる。もちろんこれは、序文で「参友不傳」が「わが師」の意を受けて出版のことを運んだと記されているのに合わせてのことである。それで慧梁は、遠羅天釜についても自分は何も知らないなどと付け加えたものと思われる。

この出典を知る前には私は慧梁の言葉の意味するところがよく分からず、ただ、出版の計画に関わってこれを終えたと述べていることだけを序文の内容と結び付けて、不伝を慧梁の別名と解していた。その結果、序文の筆跡を、それがすぐ後に続く本文のそれとあまりにも違うところから、これを慧梁の筆跡と考えた。同時に、『遠羅天釜』下巻三十二丁のうち後半、十八丁からの筆跡が序のそれと類似するため、これらを、白隱が慧梁に代筆させたものと解していた。しかし慧梁と序の筆者とを切り離すことができた今、改めて序と下巻十八丁以下とが同一の筆跡であることを確認できたと考えている。私の発表の際に序の筆跡が慧梁のものであることは「一目瞭然」だとしていたことの危うさを、実感している。<sup>4</sup> 序末尾の日付のあとに記される「炷香拝書」も、はじめ、「香を焚いて書を拝する」と読んでいたのを、いま、「香を焚き拝をして書く」と読んでいる。

(2) 「序」に白隱が筆者として自分の名を記さずに「不傳」という名を用い、「善男信女に鏡を磨かせる」ことを「わが師」の意図だとしたのは、なぜ

か。それは、「序」が平等法界一面の宝鏡から衆生と仏という二つの影が分かれ、分かれた二つの影も同じく、平等法界一面の宝鏡を離れてはいないことを説くのに応じて、師と弟子もそこから現われたものに他ならないことを知らせるためであったと思われる。そこでは「参友不傳」は、師白隠、肥前鍋島摂津守、と全く上下の差のない、本来の個である。その記す「序」は、師白隠も、香を焚いて拝する性質のものである。ただし、これを書くという行為において「参友不傳」と「わが師白隠」とは一つである。そのため署名はなされなかった。しかし両者の識別を表明するために白隠は、日常生活の文体を用いて書かれた本文の見出しの文字を、「序」の場合とは少し変えて記す必要を感じたようである。すなわち、

「遠羅天賀麻<sup>ヲラテガマ</sup>卷之上

答

鍋嶋<sup>接</sup>州殿下ノ 書

近侍ニ

ただし、卷之中「遠方ノ病僧ニ贈リシ書」、卷之下「法華宗ノ老尼ニ贈リシ書」では、「遠羅天釜<sup>ヲラテガマ</sup>」とされており、これは「序」との距離がその理由と考えられる。

序文で「秘妙」「眞祕」と、本字の「祕」を用いているのに対して、本文中では「秘訣」（上卷四十六丁左四行め）と、俗字を用いるのも、同じ方針かと思われるが、しかし同じ序文で「真修」「眞祕」と、略字と本字を併用することも見られ、また、序文では「寶」の古字「審」だけが用いられているが、本文では両方が見られるなど、一律になってはいないことも、注意されるべきことである。

## II 「遠羅天釜」と「宝鏡」

「序」を読むと、宝鏡、磨鏡、と鏡への言及があり、そして「人をして磨鏡の真修あることを知らしめ、名づけて遠羅天釜と謂う」と述べるところで、鏡と釜とが相互に密接に関わっていることを知らされる。そして遠羅天釜と

は何かを知るものは火爐頭であり、これを授ける相手も焦頭爛額 [の火爐頭] であるということから、遠羅天釜を知る人物として、中国禅宗史の上では、まず雪峯義存と玄沙師備の二人が頭に浮かぶ。

(1) 『景德伝灯録』卷十八、福州玄沙宗一大師法名師備。(読み下し) 雪峯曰く、世界闊さ一尺 [ならば]、古鏡闊さ一尺、世界闊さ一丈 [ならば]、古鏡闊さ一丈。師、火爐を指さして曰く、火爐闊さ多少 (如何)。雪峯曰く、古鏡の闊さの如し。師曰く、老和尚、脚跟未だ地に点 (ふ) れず。

(2) しかし白隠自身が究極の火爐頭として挙げるものは、「洞山良价和尚五位頌」の第五、兼中到の主体であろう。(『白隠和尚全集』第二巻、「荊叢毒蕊」巻三)

有無に落ちずして誰か敢えて [唱] 和せん。人人尽く常流 (世俗) を出でんと欲して折合して (結局は) 還って炭裡に帰して坐す。」

私は「炭裡」を「鑊湯爐炭<sup>5</sup>」裡と解する。そして白隠が「序」に言う「阿鼻無間日面鏡、月面鏡」が遠羅天釜ということになろう。つまり地獄の釜が宝鏡であるようなものが、白隠愛用の遠羅天釜であるわけである。

白隠は、正受老人が洞山の頰に参究したのを受けて、多年、わずかに「一箇半箇」の弟子とともに五位頌の秘訣を究めようと努め、延享が寛延に改元された戊辰の (1748) 年の夏、定中に忽然として「偏正回互」の秘奥が明らかになって、従来の疑問が解決し、喜びに堪えず、人に手を取って口授したい思いに駆られ、遂にこれを書きとどめた旨を、記している。第一位、正中偏は大圓鏡智、第二位、偏中正は平等性智、これは自己と萬法との兩鏡が一枚の宝鏡となっているものである。第三位、正中來、第四位、兼中至は、正受によれば、それぞれ妙觀察智と成所作智である。第五位、兼中到は四智、三身を具する、いわば歴史を越えた歴史の創造主体としての人類である。白隠はこの頰にコメントして、『華嚴經』入法界品の徳雲比丘が妙峯頂から幾度も下りてきては「癡聖人」善財を雇って、共に雪を担いで井を埋める、と言う。これらが遠羅天釜を知る「焦頭爛額」の火爐頭と言われるものである。<sup>6</sup>

(3) 白隠自身の体験としては、卷之下終に載せる漢文の述懐の最後近くに、

三十二歳で松蔭寺の住持となつてまもなくの夜、夢に母が紫絹の衣を手渡してくれた、持ち上げると両袖に重さを感じて、探ると、それぞれ古い鏡の直径五、六寸のもので、そのうち右手の鏡は心にしみる明るさで、その前では、自心にほかならない山河、大地が澄みきった、底のない深い池のようであった。左手の鏡は、全面に何の光輝くところもない、ちょうど火に触れたことのない真新しい鍋のようであった。それが突然光を發して右手の鏡の百千億倍もの明るさになった、この夢以来、何を見てもすべて自分の顔を見る思いである、と。白隠の遠羅天釜の秘密は、この、光のない鍋の底が大変な光を發するという、夢の経験に由来するように思われる。

(4) 序の「我師使善男信女磨鏡有旨哉垢尽明現」が『宗鏡録』卷六十六の表現からの引用に基づくことも、藤田氏からのご指摘で知ることができた。それで、永明延壽(904-976)の『宗鏡録』百巻を大急ぎで読み通して、白隠が「遠羅天釜序」で述べる事柄の要旨が『宗鏡録』とあい通ずること、白隠がこの膨大な書物に親しんでいたに違いないことを知った。まず、『宗鏡録』卷六十六と卷七十九とに延壽は『円覚経』普眼菩薩のための教えから同文を引用する。(大正新修大藏経卷48、790下、856中)

善男子、彼の諸々の衆生は幻身滅するがゆえに幻心もまた滅す。幻心滅するがゆえに幻塵もまた滅す。幻塵滅するがゆえに幻滅もまた滅す。幻滅・滅するがゆえに非幻は不滅なり。たとえば磨鏡して垢尽き明現ずるがごとし。(『大方広円覚修多羅了義経』、大正卷17、914下)

白隠が「宝鏡三昧」によって「宝鏡」というものは、延壽では「宗鏡」と称され、「一心を挙して宗となす、万法を照らすこと鏡のごとし」(卷一末)と言われる。卷十では、「宝鏡」という語を用いる資料が引用され、また仏と衆生とが同じ鏡のなかから現われることが述べられている。

才命論にいう、心は宝鏡に徹す、と。注にいう、それ心は物を鑑らすをもって庶品(もろもろのもの)遺らず。洞徹して幽明、宝鏡に同じ。(473中)

ただ、これ一鏡、同と異とあるなし。仏と衆生とは一鏡上の像なるのみ。

(473下)

## Ⅲ 「妙達於方」

(1) 「序」に言う「一語」、そしてその「半边」、「妙に方に達すれば、すなわちこれ、真の秘なり」と言っているものについては、『宗鏡録』にそのままの表現がありそうで、それなりの言い方に会おうが、今の所まだ見つからない。それなりの言い方とは、「妙達」と「方」について次ぎの表現があることである。

ゆえに古人いう、直に妙会して始めて得。これすなわち不会の会、妙契その中にあり。ゆえに先聖の悟道の偈にいう、有無、去來の心、永く息み、内外、中間、すべて総になし。如来真仏のところを見んと欲わば、ただ看よ、石羊生んで駒を得るを、と。かくのごとく妙に達して後は、道もなお存せず。(巻六、444下-445上)

ただ、本覚真心に因って不覚を起す。不覚に因るがゆえに始覚を成ず。地に因って倒れ、方に因るがゆえに迷うがごとし。また、地に因って起き、方に因るがゆえに悟る。(巻六、445上)

後者が『大乘起信論』の「不覚の義」についての次ぎの表現に由来することは明らかである。

言うところの不覚の義とは、如実に真如の法の一なるを知らざるが故に不覚の心起りて、その念あり、念に自相なく、本覚を離れざるをいう。猶、迷う人は方に依るがゆえに迷うも、もし方を離るれば則ち迷いあることなきが如し。衆生もまたしかり、覺に依るが故に迷う、もし覺性を離るれば則ち不覚なし。…

「もし地に因って倒るれば、還た地に因って起きる」は、『宝林伝』巻二、第四祖優波鞠多章に見られ、道元が『正法眼藏』恁麼巻に引用する。

(2) 「方」に関わる白隠自身の表現としては、巻の中「遠方ノ病僧ニ贈リシ書」、二十丁、二十三丁などの表現が参考になる。

「去りながら如上は正受老漢平生受用底の施薬にして甚だ一味單方攻撃の冷劑なり。ここに一方あり、尤も虚弱の人に宜し。」(二十丁)

「此れは是れ、養生の秘訣にして長生久視の妙術なり。此方、始め金仙氏に起って中頃、天台の智者大師に至って大いに労疲の重病を治し、且つその兄、陳秦が必死を救う澆末難遭の宝方なり。」(二十三丁)

これは、有名な軟酥による心身の病の治療法を指すものである。すなわち「方」は第一に方術を意味する。

「妙達於方」の「妙」は、「妙に」と副詞に読ませているが、「妙法」という名詞では主語となるものである。卷之下「法華宗ノ老尼ニ贈リシ書」二、三丁の一節、

「妙法の一心は展る則んば十方法界を包容し、収る則んば無念無心の自性に帰す。」

によれば、「妙」は妙法のことである。また「方」は十方のこととなる。これらの理解をここに適用すれば、他の半辺も含めて元の「一語」は、次のようになろうか。

「妙達於方、即是真祕。[収帰自性、方は無方。]」

なお、軟酥を用いての治療法を含む内観のことは、すでに寛保元年(1741)発表の『寒山詩闡提記聞』巻一終近く、道教思想を示す作品へのコメントとして書かれた漢文「夜船閑話」に紹介されており、八年間暖められて再び『遠羅天釜』巻上・中に登場するテーマであるわけである。また、『遠羅天釜』巻之下、『法華経』を論ずるところで言えば、「妙達於方」は、『六祖壇経』に恵能が法達に、「法は即ち甚だ達するも、汝の心達せず・・・吾が心正しく定まれば即ち是れ経を持するなり」と言ったとされるその表現と、そして法達の名とを連想させる。

以上において「遠羅天釜序」の提供する難問の考察を終えるが、『遠羅天釜』上中下三巻が自筆刻本で発表された寛延二年には、「五位頌」の第二頌に因んで命名された『寝惚之目覚』において「隻手音声」公案が始めて公表され、翌寛延3年には、「洞山良价和尚五位頌」を含む「洞山五位偏正口訣」を白隠は、書いて人に与えたとされる。この二年が白隠の思想展開の上できわめて

重要な時期であったことが、たとえば『寢惚之目覚』（寛延2年4月）や『宝鏡窟之記』（寛延3年）の奥書きの不思議な表現に見られることは、すでに考察したとおりである（1991年3月発行、花園大学研究紀要第23号）。寛延2年2月発表の『遠羅天釜』の序に緊張感に溢れた、響の高い表現が見られるのは、理由のないことではない。この初版、自筆刻本のあとに発行された普及版で「序」が省かれているのは、その内容の高度に思想的な表現と、参禅者の一人として大名の名が挙げられていることへの配慮とによるものと思われる。また、それだけにこの「序」の持つ意味合いは大きいと云える。<sup>7</sup>（1997年12月3日）

## 註

- 1 芳澤氏のご好意で、禅文化研究所の方々が作成された駒沢大学図書館所蔵の『遠羅天釜』刻本（『禅籍目録』駒大一八〇—二九四、三冊二巻）のマイクロフィルムを後日見る機会に恵まれることになった。金閣寺本との違いは下記の通り。

(1)表題「遠羅天釜 上」付き表紙があること。（巻中下の表紙があるかどうかは、残念ながら確かめていない。）

(2)「ヲラテガマ跋 二」左白紙の次ぎの白紙の始め、下半分に一行で、出版元らしい「駿東大平原安兵衛」の八文字が書かれていること。その筆跡は、原安兵衛本人のものと思われる。その他のことはまったく何も記されていない。

- 2 藤田氏が研究会の二日後に届けてくださったお手紙で、この鍋島撰津守直恒（1701—49）の早逝を悼む白隠の言葉が『荊叢毒蕊』巻三（白隠和尚全集巻三、pp. 98—99）に記録されていることを教えていただいた。それによって二人の交流の跡が明らかにされているので、ここにその試訳を示す。

「大智院殿の棺が西の海に行くのを送る。

憶いだす、三度あなたのご訪問が禅者の庭を輝かせたことを。なんぞ計らん、今お棺を寺の門に迎えようとは。言ってはならぬ、あの頃と今とを山河が隔てると。山河は大地と、一つの心の根を分かちもつ。

思うに、大智院殿、摂津の国の先の長官、洞然元明大居士は、人を慈しみ、思いやりがあり、穏やかで素直、謙虚で敬意に溢れておられた。鍋島家第三・四世のご先祖が戦いの場にあつてしばしば優れた功績を立てられた。その勇者の子孫としてあなたは蓮池城の領主となられ、永く慈しみの政治をされた。河の

流れは、源が深ければ深いほど遠くに伸びる。父が厳しければ厳しいほど子は賢くなる。殿下は久しく趙州無字の公案に取り組まれ、一気に西江の波浪を吸尽くしてしまわれた。近頃は私の小さな、かたつむりの仮の宿を訪ねて、談笑のなかで東山（五祖法演）の家風を尋ねあてられた。昨日は茶室を掃き清めて殿下のお越しを迎え、今日は老眼に涙を含んで香を焚く。幸いに、故人の育てられた人材の庭には、棟梁の質があり、司法の才能が養われ、黄金と珠玉とが枝からたわわに垂れ下がっている。また、聞くところでは、信頼される忠臣たちがすばらしく、慈しみ深く知恵にあふれ、激しい忠誠心をもたせておられる。私は、今、お送りする一句をささげよう。

振り向けば富士の峯に千年の雪。暁光遙か半辺を真紅に照らす。」

- 3 『祖堂集』巻十六「南泉和尚」、中文出版社 p.303 上、に、南泉が帰宗を「師兄」と呼び、帰宗が南泉を「師第」と呼ぶときに、この字が見られる。同じ頁の下では、ふつうの「師弟」の字が使われている。なお藤田氏も、『白隠和尚全集』第五巻が掲げる慧梁のこの文に「第」の代わりに「余」を充てている (p.246) ことを指摘されている。
- 4 慧梁の引用する言葉の出典を教えていただいた藤田氏は、しかし序の筆者を白隠でもなく慧梁でもない第三者とされる。
- 5 『祖堂集』巻五「雲巖和尚」十二丁に記される洞山良价の語。  
「洞山聞いて、挙して云う、此の語最も力を着く。人の鑊湯爐炭に入って焼煮を被らざるがごとくして始めて、這裏を得て永劫不失なるを得ん。」
- 6 藤田氏は、「火爐頭の人」を白隠門下の人々と解され、私の解釈を「回りくどい」と評される。そこにはご自分の僧堂体験に基づく見識があるであろう。
- 7 この発表をするきっかけは、白隠の思想を研究する目的で、イタリア、ヴェネツィア大学日本語学科の卒業論文に白隠を取り上げ、優秀な成績で卒業されたあと花園大学大学院に入られたアンナ・ルジェリさんが、禅文化研究所に芳澤氏を訪ねて、『遠羅天釜』テキストのコピーを写させてもらわれたときに、私のために今年十月始めにコピーを用意してくださったことであった。そのことがなければ、私が白隠自刻本を眼にすることは當分なかったと思われる。その意味で、この報告を私は、アンナ・ルジェリさんの求道心に捧げる。